

と言う要望が強く叫ばれるに至つた。そして遂に全国でも大変珍しいケースと思われるテングサ類の研究を主力とする試験場ができて上つたのである。正式の名称を静岡県水産試験場伊豆分場と言う。しかし地元ではテングサ試験場の名でも通る。直接の研究対象は寒天原藻以外にアマノリ類、イセエビ、アワビ等の定着性有用水族一般についても、と言う事である。スタッフとして海藻方面には、本会々員の山崎浩氏がおられる。

伊東駅を發して伊豆半島東海岸に沿い、バスに揺られる事約2時間、やがて終点下田に達する20分程手前、左眼前に開けた白浜の海辺を前にクリーム色の蕭洒な建物の試験場を見る事ができるであろう。所在地は静岡県賀茂郡下田町白浜板戸(旧白浜村)である。

テングサで名高い伊豆半島は又一般の海藻類にも大変富んでいる。あらかじめ連絡されれば、海藻類の研究の為に伊豆を旅する方達には、できるだけ宿泊等の便宜を計る由である。尙この事に関しては下田臨海実験所も同様である。

(千原光雄—東京教育大学下田臨海実験所)

新 著 紹 介

ブラールード・セーレンセン共編

第2回国際海藻専門討議会

(トロンドハイム・1955年7月)

J. BRAARUD & N. A. SORENSEN: Second International Seaweed Symposium (Held in Trondheim, July 1955)

— Published by Pergamon Press Ltd. London & New York 1956 —

本書は1955年7月14日から17日までノールウェイ国トロンドハイム市のノールウェイ工業大学に於いて開催された第2回国際海藻専門討議会の記録である。

本文は220頁よりなり、討議会に於いて論題40につき5部門に亘つて、参加国15カ国即ちカナダ、スコットランド、ノールウェイ、アメリカ、スウェーデン、スペイン、イギリス、デンマーク、ベルギー、ドイツ、エジプト、フランス、日本、中国、南阿の諸国からの出席者によつて講演並びに討論が行なわれた。この討議会に出席せる世界の学者90名(同伴34名)の氏名所属の目録が巻頭に示されている。世界的海藻研究の現況を知るのに好都合かと思ひ簡潔に紹介する。

第1部門 海藻の化学成分

- (1) カラギニンのX線及び赤外線の研究。(2) *Cladophora rupestris* の水溶性多糖類。
- (3) ノールウェイ沿岸の異地域に産する *Laminaria digitata* の化学成分の季節的变化。
- (4) 或るノールウェイ産海藻のカロチン含有量とその分析について。(5) チノリモの或る成分。

(6) *Fucus vesiculosus* 死後のカロチノイドの変化。(7) 褐藻及び紅藻に於ける低分子炭水化合物。(8) 海藻のビタミンについて。(9) スペイン産褐藻類の化学成分の変異。(10) 異質カラギニンの研究。

第2部門 海藻の利用

(1) 海藻より産出する抗生物質。(2) 血液凝固阻止剤としてのラミナリン硫酸ソーダ。(3) 海藻のビタミン含有量とその重要性。(4) 海藻の乾燥に関する研究。(5) ヒヨコ並びに産卵鶏への添加飼料としての海藻食の実験。(6) アルギン酸とステアリン酸の化合物。(7) 貯蔵飼料としての海藻。(8) 海藻より抽出のマンニツトとラミナリン。(9) 人体栄養の微量元素源としての *Marcrocystis pyrifera* の利用。(10) 海藻を飼料にした鶏卵のヨード含有量。(11) 種々のアルギン酸ソーダ製品の性質の比較。

第3部門 分析及び検出法

(1) 複屈折法による組織内のアルギン酸の検出について。(2) アルギン酸の定量分析。(3) アルギン酸の微量分析。

第4部門 微生物学

(1) 微生物によるラミナリンの分解。(2) カラギニンの酵素に依る加水分解。

第5部門 海藻の植物学的研究

(1) 潜水によるカリフォルニア海岸沖合に生育せる海藻の底棲群落の量的研究。(2) *Alaria* の柄の生長輪。(3) 或るフークス科植物の生長時期と生長率の観察。(4) フークス科植物の生長抑制。(5) 南支那の経済的に重要な海藻。(6) 南アフリカのオゴノリの生態。(7) 経済的に重要な海藻集団の研究。(8) 英国産コンブ3種の観察。(9) *Ascophyllum* 群落の研究。(10) *Ascophyllum nodosum* の気候生物学。(11) スコットランド近辺の *Laminaria cloustoni* の周年変化。(12) 硫化水素に対するオゴノリの抵抗力。(13) 有用海藻群落の図示の一考察。(14) 日本及びその隣接地域沿岸の *Sargassum* の分布に就て。

以上の如く討論会は基礎部門のみならず海藻利用部門の専門家も集り報告がなされている。世界的にみて海藻資源の開拓の為、従来の経験的なものより脱皮して、科学的基礎のもとに推進されなければならない事、亦化学殊に生物化学的研究の必要性が生じ、これを背景とせる報告も多くなされた。本書では或るものは詳細に、或るものは抜萃に留められているものがあるが両者共に、編集者に依り加筆訂正を加えず印刷に付してあることをことわつている。

尙本会の運営委員会は本著書の編者の一人ブラールード教授(オスロー大学)が座長を勤め、同じくセーレンセン教授(トロンドハイム工業大学)及びノールウェイ海藻研究所のスタッフ等が役員として本会合を遂行した。

日本からは山田教授が第5部門に於いてホンダワラ属の講演を行なつた。

(舟橋説往—北海道大学理学部植物学教室)